本を選ぶ

NO.462 2023年(令和５年)１１月２０日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぽわん>ジュニパーベリー

●大学教員ノート 第１０回

●認知症希望条例アクションチームについて

ろん・ぽわん

ジュニパーベリー

ウェブで何かを検索していると、目的に行きつく手前で、気になる全く別の情報があると思わず寄り道して、そのうち何を探していたのかを忘れてしまい我ながら苦笑するほかない。

同様に自宅の書棚で本を探していると、やはり他の本に目移りしたりする。先日もホイジンガの『中世の秋』を手に取って、付箋のついた頁をめくってみる。すると 50 年前の曖昧な記憶が蘇って、さまよったりする。目を止めたのは、ヨーロッパ中世の人々が遺体を釜ゆでにするくだりで、「故郷を離れ遠方で死んだ貴人の遺骸はこま切れにされ、長い間煮られる。肉と骨が分離すると骨は洗って行李につめ、正式の埋葬のため故郷に送られ、一方内蔵や他の残物はその場所に埋められた」(『中世の秋』278 頁（第十一章　死の幻像）／兼岩正夫／里見元一郎　共訳／河出書房新社／ 1972 年)。西欧では 12、13 世紀以降こうした風習が広く流布していたらしい。

傍らの余白に書き込みがあり、ネズの木、とある。グリム童話のようだ。脱線ついでにグリム童話の本を追ってみたが、手許では見つからない。やむなく青空文庫で中島孤島訳『杜松の樹』を読んでみた。遺体を煮るあたりを連想したのか。なにしろグリム童話には残酷な展開が多い。ネズの木の話もかなり恐い話だ。研究者の論文を読むとそれなりに興味深い（「グリムの『ねずの木の話』: 或る「残酷な」昔話」／西口拓子／専修人文論集 82 181-203, 2008-03-21 ／専修大学学会)

ネズの木は、日本名ではビャクシン（百槇、柏槇、杜松とも表記。ネズミサシとかムロの木とも呼ぶ）など地方によっていろいろ呼び方がある。雌雄異株で双方に実がつくが、雌木についた実のジュニパーベリーは香料としてさまざまに使われ、その活用の歴史が古くから伝わる。以前、ウイーンを旅した折、小さな市場で見掛けた大きな樽に漬け込まれたザワークラウトには、香り付けの月桂樹の葉のほかジュニパーベリーが入っていた。千切りキャベツに塩や白ワインを加えてつくる酢漬けで、ドイツやオーストリアそして北フランスの伝統的な豚肉料理の付け合わせとして添えられる。店の人は風味付けのスパイスで乳酸発酵の趣が変わると言っていた。粒胡椒、キャラウェイシード、クローブ、唐辛子なども使うそうだ。

ジュニパーベリーは蒸留酒ジンに欠かせない香り、ジンと言えばジュニパーベリーの香り、とも言える。近年盛んになった日本のクラフトジンも当然使っているので、あああれかとスピリッツ好きの方は思われるだろう。国内産はほぼないので、ほとんどはバルカン産（アルバニア、マケドニア、ブルガリア産など）を使っているそうだ。(→ＬＩＱＵＬのＨＰ）もちろんアロマオイルとしても有名だし、その活用法は実にさまざま。(埜村 太郎)

大学教員ノート 第１０回
－全人間的に試される－

石川 敬史

ねぇ～、読書感想文を書きやすい本ない～？

地元のＡ町立図書館。大学３年生のときに「図書館実習」で図書館車に同乗し、とあるステーションで小学生に声をかけられた。「えっ」と戸惑っていると、同乗していた図書館員Ｂさんがスッと優しく語りかける……。小学校へも巡回し、たくさんの子どもたちが集まってきた記憶も……。微かな記憶であるが、大学生時代の移動図書館との接点であり、地元を走っていた「コスモス号」との懐かしい思い出である。

あれっ、時間は言いましたかね？

大学院生時代、Ｃ県立図書館の移動図書館に同行させていただく機会を得た。学部学生時代から親しくさせていただいた図書館員Ｄさんの「ご高配」――助手席でマイク片手にアナウンスをさせていただいた。緊張のせいか、原稿を一行読み飛ばしてしまったのだ。それでも子どもたちが集まってきた（と思う）……。確か片道２時間近くかかっただろうか、公立図書館未設置の中山間地への巡回――この当時、更新された新しい「さきたま号」への同乗は、初めての移動図書館の見学であったと記憶している。

ほ「ン」の貸出しを行います！

大学の教員になっても移動図書館の見学を重ねている。学生とともに見学させていただいた移動図書館も複数あるが、このうちＥ町立図書館の移動図書館見学はとにかく楽しかった。図書館員Ｆさんの「ご高配」――助手席でマイク片手にアナウンスさせていただいたのは学生である。緊張のあまり、「本」の「ン」が裏返ってしまうアナウンスは、Love is Blue（L'amour est bleu）の音楽とともに、Ｅ町内に響きわたった。ステーションに到着するまで、10分近くかけてぐるぐると住宅地をアナウンスして巡回する「せせらぎ号」。ステーションに到着しても、学生と図書館員Ｆさんとの会話が絶えない移動図書館現場であった。しかし2023年３月末で運行中止となってしまい寂しい。

ちょっとしばらく車庫の前で待ってて。

移動図書館見学は、もちろん歓迎されない場合もある。日常業務に加えて、慌ただしい中での出発準備となるからだ。確か２月の風が冷たい季節、Ｇ市立図書館脇にある図書館車の車庫の前でポツンと一人立ち続けていた。20～30分は待ったであろうか（いや５分位だったかもしれない……）、シャッターが開き、図書館車と対面したときの感激は、今でもはっきりと記憶している。このＧ市立図書館「もくせい号」は市内の一部の病院へ巡回していることでよく知られている。図書館員がナースステーションのマイクを自然体に扱い、来館を呼びかけている姿には驚いた。実際に現場を視ないと分からない光景である。1970年代から病院への貸出しが行われているＧ市立図書館の理念の源流であった。

休憩しましょう。ブラックの缶コーヒーでいいですかね。

都道府県立図書館による移動図書館は、現在（2023年）のところ２館に限られている。このうちＨ県立図書館「自動車文庫」への同乗の機会をいただいた。この日は片道約２時間半、運転手のＩさんとの長旅の行程である。最初の目的地・Ｊ村へ到着するころにはしだいに雪が舞ってきた。雪の中、幼稚園や小中学校の先生、社会教育主事、役場職員らが一生懸命に図書を選ぶ後ろ姿は忘れることができない。Ｊ村内各所に配架する図書を「自動車文庫」から選んでいるという。２時間半の移動もあっという間であった。Ｊ村からＫ町への移動途中、Ｉさんが腰を

痛めたこと、本を読むようになったこと――助手席でブラックの缶コーヒーを片手に、移動図書館は多くの人々を巻き込んでいると痛感した。

寒いので、車の中に入りますね。

4台ものカラフルな図書館車を保有しているM市立図書館。地下の車庫に並んでいる姿に圧倒される。この4台のうち、「つばき号」が離島へ巡回するコースに同行させていただいた。3月ではあるが、とにかく風が冷たく肌が痛い。共に同行した他の図書館員は我慢できなかったようだが、島民の方々がどこから、どのように「つばき号」へ「来館」するのであろうか……と島の日常を直視したいと思い、ポツンと立ち続けていた。写真や動画ではわからない島の日常、島民の会話、歩くスピード、本を持つ姿――「こんにちは、風が冷たいですね」――「つばき号」が島の生活に浸透していることに気がつく。

＊　＊　＊

車庫で休んでいる図書館車を見るのは簡単であるが、移動図書館の「動く」現場を視ることはなかなか難しい。移動図書館に同行させていただく際には、「建物」の図書館の見学とは異なり、図書館車を随行する手段の手配をはじめ、「何月何日何時に〇〇へ」と日時と場所が指定されるされることがよくある。多くの場合は、ほぼ1日同行させていただくため、移動図書館を背負う図書館員の方々との何気ない会話や信頼関係の構築はとてもとても大切である。時にはコンビニの駐車場で休憩し、時には地元の食堂で昼食をとり、時には信号待ちの図書館車へ歩行者から手を振られることもある。年間何回も気軽に見学に伺わせていただくことはなかなかできない……。

調査地被害――される側のさまざまな迷惑

民俗学者の宮本常一の言葉である。『探検と冒険：朝日講座7』（朝日新聞社／1972）に初出されているほか、『調査されるという迷惑―フィールドに出る前に読んでおく本』（宮本常一、安渓遊地／みずのわ出版／2008）にも所収されている。

人文科学が訊問科学に　偏見理論がもたらすもの　「調査してやる」という意識　略奪調査の実態

大学院生時代、オーラルヒストリーという研究方法に関心があり、実践を重ねていたため、フィールドワークや参与観察、定性的調査などの研究方法の理解に没頭していた。その時に出会った言葉である。これらの章から刻まれる「調査地被害」は、移動図書館の現場へ向かう時に意識している。忘れてはならない言葉である。

フィールドワーカーというのは、現地の人たちから見ればよそ者なのです。

さらに佐藤郁哉の『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』（新曜社／1992）から、現地・現場で立つ自分自身への視線と心構えを学んだ。『ストリート・コーナー・ソサイエティ：アメリカ社会の小集団研究』（W・F・ホワイト著；奥田道大、有里典三訳／有斐閣／2000）は読破できなかったが、『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』（佐藤郁哉／新曜社／1984）から、「分厚い記述」の意義と世界を学んだ。

学部学生の卒業論文から始まった移動図書館研究――この間、全く成長しておらず、批判もされた。が、C県の移動図書館を牽引した鈴木四郎の言葉は、講演会や研修会で毎回紹介している。移動図書館とは何か、さらには移動図書館の現場を視るとは何かが刻まれている。

移動図書館はね、市町村に出て行って対話をして、あの頃だったら、夜、映画会となって町村の職員や村の人と協力してスクリーンを張る丸太を組んで会場の設営を行う、また町村の三役と酒を酌み交わし、読書会で青年と話し合うといった、多角的な人格が要求されるんですね。単に図書館学の理論だけでは駄目なんで、全人間的に自分というものを試される訳です。（鈴木四郎「移動図書館　→＊5頁へ

認知症希望条例アクションチームについて

後藤 婉子

今回編集部より原稿依頼をいただき、現在私が参加している世田谷区認知症希望条例アクションチームについて書かせていただこうと思う。

まず世田谷区認知症希望条例について、正式名称は「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」で、令和2年10月に施行された。

「認知症とともに生きる人（「認知症当事者」という言葉を使用していないのが大きな特徴）の権利が尊重され、本人を含む全ての区民が認知症とともに生きる希望を持って暮らすことができる」を目的とし、「安心して暮らし続けることができる地域を作る」ことを基本理念として掲げている。

この条例の理念を実現するため、令和3年3月に「世田谷区認知症とともに生きる希望計画」が策定され、この計画に掲げる「認知症観の転換」や「地域づくり」を推進するためのアクションチームをつくるということで、区内28ヶ所のあんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）の管轄区域で活動が進められている。

私が参加しているのは、勤務先の世田谷区立桜丘図書館のある地区を管轄している経堂あんしんすこやかセンターのアクションチームで、本来であればチームの構成員は、医療機関や介護事業所の関係者ということになるかと思うのだが（実際参加している他のメンバーはそのような方々で主である）代表の方が図書館の入っている区民センターの隣にお住まいで図書館のヘビーユーザーで、図書館としてぜひ関わっていただきたいとお声がけいただいたのである。

確かに本はあらゆる分野とつながることのできるもので、認知症についてもたくさんの本があり出版も増加傾向にあると思う。他の図書館に在職していた時に、認知症の症状で手続きしていない本を持ち帰ってしまう方や、症状が出てきて利用カードの紛失を繰り返すようになり、利用が困難になってしまった常連の方がおり、図書館は関係ないということはなく、むしろこれからそのような方々の対応を考えていかなければならないケースが増えていくのではないか。

そんな気持ちもあり、また図書館員として地域の活動にかかわることはよいことだと思ったので昨年6月より経堂アクションチームに参加することになった次第である。

月一度の例会で早速、レビー小体型認知症（記憶障害でなく幻視やパーキンソン症状、睡眠障害が出る認知症）の当事者で、読み聞かせの活動をされている方の講演会を行う案が浮上し、アクションチーム第1号の事業は図書館主催・アクションチーム後援で行われることになった。

講演会は60人あまりの参加者があり、盛況ではあったが、講師の方は子ども達への読み聞かせをメインでやりたかったという希望があったためアクションチームのメンバーでスポーツクラブの職員の方が運動指導でかかわっている管内にある東京農業大学の付属小学校のアフタースクール（学童保育）の自由時間に行ってはどうかということになり、早速第一回目の会が行われた。

アクションチームの活動の中心は、参加している認知症当事者の方が、認知症になったためにできなくなってしまったことを、メンバーが協力してできるように助力するということで、講演会後に参加してくださるようになった当事者の方から「落語を聴きに行きたいのだが、認知症のため出かけることが難しくなったので、身近な場所で聴けると嬉しい」という要望があったので、区民センター内の大広間（舞台のある畳の部屋）を借り切り、東京農業大学の落語研究会の部員と、認知症落語を創作でやっておられる東京都立松沢病院の先生に出演いただいて落語の会を開催した。

これらのイベント的なもの以外にも「スポーツクラブに通っていたが、認知症の症状で出てきて、ロッカーがわからなくなったりとか問題行動が出てしまう不安があって行けなくなってしまったので、また行けるようにならないだろうか」「タブレット導入する店が増えてきて、買い物がしづらいの

で、店員とのやり取りでも買い物できるようにならないだろうか」等の要望を、メンバーが直接スポーツクラブなり商店会に行って、希望が実現できるよう話し合いをもつということも行っている(現在交渉中)。

認知症関連の事業への参加も積極的で、「RUN伴」という全国規模の駅伝的プロジェクトの世田谷区版に参加したり、先日は、FMせたがやというラジオ局の「認知症あんしんすこやかライフ」という番組に呼ばれて、経堂アクションチームの取り組みについて話をしたり、毎月何かしらの行事がある。

図書館としてという以前に正直なところ私自身が活動に参加することを楽しんでいるところがあり、また個人的な話になるが、メンバーの中に家族が介護用品のレンタルでお世話になっている会社の営業の方がいらして、その方は直接の担当者ではなかったものの、ケアマネージャーさんとも地域つながりで顔見知りの関係だったため、自宅で生じた事案の相談にのっていただくことができ早くに問題を解決することができたというおまけまであった。

全国的にも認知症に関して図書館としての意識の高まりはあるようで、昨年の『図書館雑誌』の８月号で「認知症にやさしい図書館をめざして」という特集が組まれており、京都市や広島市等の取り組み事例が紹介されている。

また、日本認知症官民協議会が作成した「認知症バリアフリー社会実現のための手引き」の図書館編がこの３月に発行され、ウェブサイトに公開されている。

これからも、図書館でという視点は押さえつつ積極的にいろいろな活動に参加し、そこで得られたことを図書館運営に反映させていきたい。

（ごとう　わかこ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊３頁から＊　ＯＢ大いに語る」『埼玉の移動図書館：30周年記念』埼玉県移動図書館運営協議会／1980）

＊　＊　＊

今号で第10回――2019年４月より連載の機会をいただいた拙稿「大学教員ノート」。この間，多くの皆様より「読みましたよ！」とお声がけいただいた。感謝に堪えない。情報が忙しなく消費され続けるSNSという時流と距離をおき，気がつくと省察しながら「ことば」をじっくり編む時間を大切にするようになった（と思う）。年２回の連載ではあるが，毎回毎回，微力である自分自身が試されていると感じている。読者の皆様への感謝を忘れずに連載を続けていきたい。

（いしかわ　たかし：十文字学園女子大学）

ＤＭかたろぐ

ESTRELA
■2023年11月号
No.356/11月10日発行
B5判　64ページ
定価1,205円(税込)

〔特集〕サイエンス時代の統計人材育成
■ 危機的状況を救えるか？　統計エキスパート人材育成
千野 雅人(統計数理研究所 大学統計教員育成センター長・特任教授)
■ 大学統計教員育成研修の指導方針・方法
―統計エキスパート人材育成プロジェクト半ばでの感触―
水田 正弘(統計数理研究所 大学統計教員育成センター 特任教授)
■ 社会科学とデータサイエンスの知を融合した人材育成へ
―一橋大学ソーシャル・データサイエンス学部・研究科
渡部 敏明(一橋大学ソーシャル・データサイエンス学部・研究科 学部長・研究科長・教授)
■ 高等教育の質保証制度と統計教育：英米の事例から
村澤 昌崇(広島大学高等教育研究開発センター 教授)
野田 文香(大学改革支援・学位授与機構 教授)
樊 怡舟(広島大学高等教育研究開発センター 特任学術研究員)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6　能楽書林ビル５階
TEL：03-3234-7471　https://www.sinfonica.or.jp/

N.スタンリック／藤井翔太 訳

アメリカ哲学入門

定評ある入門書であるとともに従来哲学史観に挑戦する書。 3630円

M.シュトライス／福岡安都子 訳

ドイツ公法史入門

数世紀にわたる憲法の歴史を描く、ドイツ公法史の金字塔。 3850円

勁草書房（けいそう書房） TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854 ＊価格税込

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 https://www.keisoshobo.co.jp

2024年 春スタート 朝ドラ主人公のモデル

三淵嘉子と家庭裁判所

清永 聡[編著] ●NHK解説委員

日本初の女性弁護士、初の女性判事であり、家庭裁判所創設にもかかわった三淵嘉子さん。その後、日本で初の女性裁判所長になる。

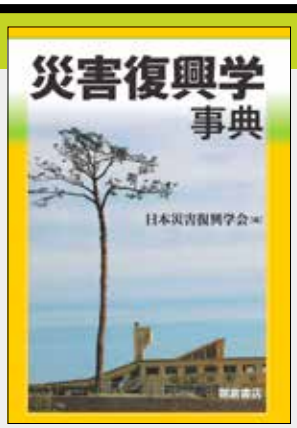
本書は彼女の評伝とゆかりの人々、後輩の方々の証言を通じて、現代に通じる三淵嘉子さんの人となり、そして足跡を編んだものである。

定価1320円(税込) ISBN 978-4-535-52745-4 12月18日発売／B5判

日本評論社 〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621 https://www.nippyo.co.jp

---

日本災害復興学会 編



災害復興学事典

ハード・ソフト面の双方から災害復興について考える。

「復興とは何か」「支援の方向性」といった多様な見解が見られるテーマも取り扱う。

A5版 304頁
定価 6,930円（本体 6,300円）
ISBN978-4-254-50036-3

朝倉書店 東京都新宿区新小川町6-29 〒162-8707 TEL03-3260-7631

調べる学習百科

ふしぎだらけのウナギ

近年になって解明されたウナギ研究の最新版！

わからないことだらけだったウナギの生態。最新のウナギ研究から分かった不思議でおもしろいウナギの秘密を1冊で解き明かす！生物、水産業、食文化など、多角的にウナギに迫ります！

黒木 真理・監修
●定価：本体3,600円＋税 ●全1巻
●A4変型判（29x22㎝）／64頁
●ISBN978-4-265-08666-5
小学校中学年～一般

この1冊が未来をつくる 岩崎書店 〒112-0005 東京都文京区水道 1-9-2-2階 TEL 03-3812-9131 FAX 03-3816-6033

マクロ経済動学

景気循環の起源の解明

榆井 誠 著

景気はなぜ変動するのか――古い問いに新しい答えを。新しい景気循環理論を解説する画期的な一冊。ミクロの相互作用がマクロの変動を生み出すメカニズムを解明。

A5判 3,300円

戦後日本社会論

「六子（むつこ）」たちの戦後

浜 日出夫 著

戦後日本社会の変容を，映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の登場人物「六子」とその家族のありえたかもしれない人生を追いながら説明していく。

四六判 2,530円

有斐閣 東京都千代田区神田神保町2-17 https://www.yuhikaku.co.jp/ 価格は税込

非電化工房 藤村靖之

地球の冷やし方

ぼくたちに愉しくできること

地球を冷やし、思考をアップデートする、エネルギー・食・生活など9カテゴリー77のアイディア。安価でできて幸福度が上がる、あたらしいライフスタイルの提案。本文オールカラー。

2860円

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-11 Tel 03-3518-4940 https://www.shobunsha.co.jp/